

# 「不登校」児童の家庭・学校間「行き来」駆動抑制進要因 —家庭から外に出るとき・外から学校に入るときに注目して—

笹倉千佳弘\*<sup>1)</sup>，井上寿美<sup>2)</sup>

1) 滋賀短期大学 生活学科，2) 大阪大谷大学 教育学部

## The Suppression Factors of School Refusal Children's "Comings and Goings" Drive between Home and School

—Focusing on When They Go out from Home and When They Go into School from Outside—

Chikahiro SASAKURA<sup>1)</sup>, Hisami INOUE<sup>2)</sup>

1) Department of Living Science, Shiga Junior College,

2) Faculty of Education, Osaka-Ohtani University

抄録：本研究の目的は、「不登校」児童の家庭と学校間における「行き来」駆動の抑制要因を、「家庭から外に出るとき」と「外から学校に入るとき」に注目して明らかにすることである。7人の小学校教員に半構造化インタビューを実施し、収集されたデータを分析した結果、家庭から外に出るときの駆動抑制要因は、「家庭の養育環境が不十分である」、「家族と地域住民との関係が良好でない」、「学校に行かないことが家庭内の居心地の悪さにつながらない」という3つであり、外から学校に入るときの駆動抑制要因は、「集団生活に馴染みにくい」、「教員の指導が十分に行き届いていない」、「障害等による発達上の特性がある」という3つであることが明らかになった。またこれらの駆動抑制要因は、子どもが家庭と学校間を「行き来」するためには、子どもにとって、家庭や学級が、安心できる集団、開かれた集団、インクルーシブな集団となっている必要があることを意味していると考えられた。

キーワード：小学生，抑制要因，インタビュー調査

### 1. 目的

本研究の目的は、「不登校」児童の家庭（児童養護施設等で暮らす子どもについては施設等を家庭とする）と学校間における「行き来」駆動の抑制要因を、「家庭から外に出るとき」と「外から学校に入るとき」に注目して明らかにすることである。ここで言うところの「外」というのは、家庭でも学校でもないところを指している。「登下校」ではなく「行き来」という用語を使う理由、家庭から

---

\*E-mail: c-sasakura@sumire.ac.jp

「不登校」児童の家庭・学校間「行き来」駆動抑制進要因

外に出るときと外から学校に入るときに注目する理由、小学生に注目する理由を順に述べることにする。

最初に、「登下校」ではなく「行き来」という用語を使う理由は次のとおりである。「登下校」に含まれている登校という用語は、家庭から学校へ「登る」ことを意味している。つまり「登下校」という用語は、家庭よりも学校に価値がおかれた用語であると言える。家庭も学校も子どもにとってはともに大切な暮らしの場であり、両者に優劣をつけないようにするため、「行き来」という用語を使う。

次に、家庭から外に出るときと外から学校に入るときに注目する理由は次のとおりである。家庭と学校間の「行き来」というのは、「家庭から外に出る」、「外から学校に入る」、「学校から外に出る」、「外から家庭に入る」という4つの行動によって構成されている。したがって家庭と学校間の「行き来」駆動では、これら4つの場面を検討する必要がある。本研究ではまず、「登校」にあたる、家庭から外に出るときと外から学校に入るときに注目する。

最後に、小学生に注目する理由は次のとおりである。「表1」及び「図1」は、2016（平成28）年度の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（文部科学省）をもとにして、小学校・中学校・高等学校の暴力行為発生件数・いじめ認知件数・長期欠席者数<sup>1</sup>を抽出し作成したものである。ここからわかるのは次の2点である。1点、暴力行為については、中学校と高等学校で減少しているにもかかわらず、小学校で大幅に増加しているということである。2点、いじめと長期欠席については、中学校と高等学校に比較して、小学校の増加率が一番、高いということである。このように小学生に何らかの異変が生じていると推測されることから、小学生に注目するに至った。

表1 小学校・中学校・高等学校における暴力行為発生件数・いじめ認知件数・長期欠席者数

	暴力発生件数 (件)			いじめ認知件数 (件)			長期欠席者数 (人)		
	小	中	高	小	中	高	小	中	高
2015年度	17,078	33,073	6,655	151,692	59,502	12,664	63,091	131,807	79,357
2016年度	22,841	30,148	6,455	237,256	71,309	12,874	67,093	139,200	79,391
増減	33.7%増	9.7%減	3.1%減	56.4%増	19.8%増	1.6%増	6.3%増	5.6%増	0.04%増

平成28年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（文部科学省）をもとに笹倉・井上作成

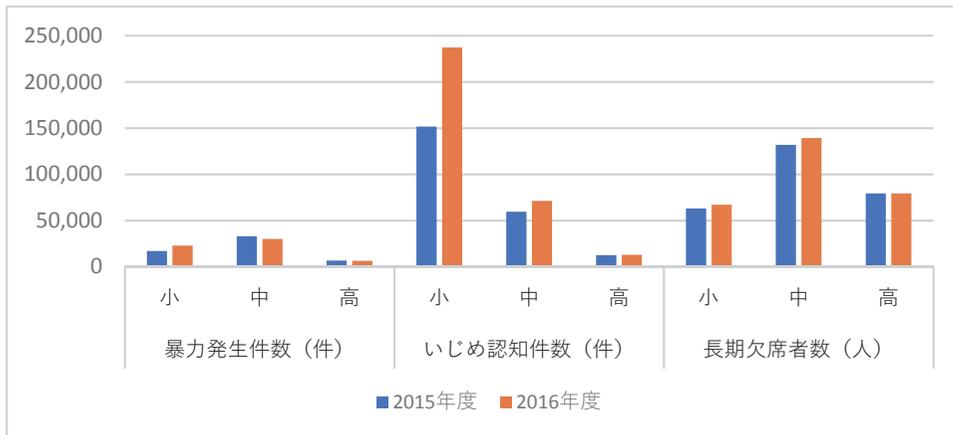


図1 暴力行為発生件数・いじめ認知件数・長期欠席者数

「不登校」児童を取りあげた先行研究は多数あるが、管見の限り、家庭と学校間の往復運動という視点、言い換えれば、「行き来」概念の視点から検討を加えたものはない。さらにこのような往復運動を、「家庭から外に出るとき」、「外から学校に入るとき」、「学校から外に出るとき」、「外から家庭に入るとき」という4つの場面に分けて検討したものもない。本研究は、「不登校」をめぐる諸課題に対して、「行き来」から生じる4つの場面を動的な側面からアプローチをしているという点で、従来の「不登校」研究に新たな知見を加えることができるのではないかと考えている。

## 2. 方法

### 2.1 インタビュー調査の概要

インタビューは、2017年8月11日～31日の期間に、X県の公立小学校に勤務する7人の小学校教員に実施した。基本的には調査者2人が指定された場所を訪問し（8月29日のインタビュー調査のみ調査者は1人）、60分～120分、学校と家庭間の「行き来」に困難な状況にある/あった子どもの家庭状況や学校状況等に関する質問に答えてもらう形式と、特定の質問項目にこだわらず自由に語ってもらう形式を組み合わせた半構造化インタビューを実施した。インタビュー内容はICレコーダーに録音し、後に逐語録を作成した。インタビューにおける調査協力者・調査日・調査場所・調査時間については「表2」を参照されたい。

表2 インタビュー調査の概要

調査協力者（性別）	調査日	調査場所	調査時間
A（男性）	2017年8月11日	B教育会館	111分
C（女性）	2017年8月16日	D教育会館	76分
E（男性）	2017年8月29日	F教育会館	60分（録音部分は34分）
G（男性）	2017年8月30日	H教育会館	68分
I（男性）	2017年8月30日	J教育会館	93分
K（男性）	2017年8月31日	L教育会館	77分
M（女性）	2017年8月31日	N教育会館	78分

## 2.2 分析の方法

最初に、インタビュー資料の中から学校と家庭間の「行き来」駆動を抑制する要因として言及されたセグメントを切り出し、家庭から外に出るときに生じているものと外から学校に入るときに生じているものと大別した。次に、切り出されたそれぞれのセグメントにコードを付し、カテゴリー化をおこなった。

## 2.3 倫理的配慮

調査は、就実大学・就実短期大学研究倫理安全委員会で承認されており、日本教育社会学会研究倫理宣言を遵守した。調査協力者に対する人権保護については、具体的に以下の手続きでおこなった。

調査に先立ち、調査協力者には、a. 調査目的、b. 調査方法、c. 調査不同意の際に不利益を受けない権利、d. データの管理法、e. 調査協力者が中止・保留を申し出る権利、f. 入手したデータの公表について、依頼文書で明確に示し調査協力の同意を得た。調査開始時に、「インフォームドコンセントに関する説明文書」を提示し、その内容を読み上げて説明し、調査協力の「同意文書」2通に署名を得た。そのうちの1通を調査協力者に手渡し、他の1通は調査者が受け取り保管している。その際に「同意撤回書」もあわせて手渡し、その使用方法について説明した。調査結果の公表にあたっては、氏名や地名といった固有名詞はすべてランダムにアルファベットで表記し、個人や個別の学校が特定されないように配慮している。

## 3. 結果

以下では、家庭から外に出るときと外から学校に入るときに分けて述べる。

### 3.1 家庭から外に出るとき

家庭から外に出るときの「行き来」駆動抑制要因にかかわるセグメントから、①不規則な生活、②

衣食住に関する不十分なケア, ③非協力的な親の姿勢, ④母子分離不安, ⑤家庭外とのコミュニケーション不全, ⑥地域住民による家族への批判的見直し, ⑦きょうだいの「不登校」傾向, ⑧母子の結束, ⑨自分の世界へのひきこもり, という9つのコードが抽出された。そして, ①～④のコードは(1)「家庭の養育環境が不十分である」とカテゴリー化され, ⑤～⑥のコードは(2)「家族と地域住民との関係が良好でない」とカテゴリー化され, ⑦～⑨のコードは(3)「学校に行かないことが家庭内の居心地の悪さにつながらない」とカテゴリー化された。詳細は「表3」を参照されたい。以下ではカテゴリー別に述べる。

カテゴリー	コード	テキスト概要
家庭の養育環境が不十分である	不規則な生活	家庭の生活リズムが不規則である
	不規則な生活	夜更かしをしてゲームをしたり音楽をきいたりすることで生活リズムが乱れている
	衣食住に関する不十分なケア	母親に知的障害があり衣食住のケアが十分になされていない
	非協力的な親の姿勢	子どもが学校に行かないことに関して, 親に危機感がない
	非協力的な親の姿勢	家庭訪問時に親が居留守を使う
	非協力的な親の姿勢	子どもを学校に行かせようという意識が親に薄い
	母子分離不安	弟が生まれたことをきっかけにして母親から離れることが困難になった
家族と地域住民との関係が良好でない	家庭外とのコミュニケーション不全	家庭内でのコミュニケーションは取れているが, 家庭外とのコミュニケーションは取れていない
	地域住民による家族への批判的見直し	生活保護家庭の収入に不釣り合いな高額商品を購入しており, 地域住民から違和感をもって受けとめられている
学校に行かないことが家庭内の居心地の悪さにつながらない	きょうだいの「不登校」傾向	兄が「不登校」気味である
	きょうだいの「不登校」傾向	姉が「不登校」傾向である
	母子の結束	母子家庭の密な親子関係が学校に行かないという結束状況を生み出している
	自分の世界へのひきこもり	社会的でなく自分の世界に入りやすくひきこもりになる

### (1) 家庭の養育環境が不十分である

「家庭の養育環境が不十分である」というカテゴリーは, 「不規則な生活」, 「衣食住に関する不十分なケア」, 「非協力的な親の姿勢」, 「母子分離不安」という4つのコードから構成された。各コードでは次のような内容が語られた。「不規則な生活」では, 夜更かしをしてゲームをしたり音楽をきいたりすることで生活リズムが乱れている, 「衣食住に関する不十分なケア」では, 母親に知的障害があり十分な食事が提供されていない, 「非協力的な親の姿勢」では, 家庭訪問時に親が居留守を使う, 「母子分離不安」では, 弟が生まれたことをきっかけにして母親から離れることが困難になったということであった。

(2) 家族と地域住民との関係が良好でない

「家族と地域住民との関係が良好でない」というカテゴリーは、「家庭外とのコミュニケーション不全」，「地域住民による家族への批判的眼差し」という2つのコードから構成された。各コードでは次のような内容が語られた。「家庭外とのコミュニケーション不全」では、家族間でのコミュニケーションは取れているが、地域の人とのコミュニケーションは取れていない、「地域住民による家族への批判的眼差し」では、生活保護家庭の収入に不釣り合いな高額商品を購入しており、地域住民から違和感をもって受けとめられているということであった。

(3) 学校に行かないことが家庭内の居心地の悪さにつながらない

「学校に行かないことが家庭内の居心地の悪さにつながらない」というカテゴリーは、「きょうだいの不登校傾向」，「母子の結束」，「自分の世界へのひきこもり」という3つのコードから構成された。各コードでは次のような内容が語られた。「きょうだいの不登校傾向」では、兄が不登校気味である、「母子の結束」では、母子家庭の密な親子関係が、学校に行かないという結束状況を生み出している、「自分の世界へのひきこもり」では、社会的でなく自分の世界に入りやすいため、ひきこもりになるということであった。

### 3.2 外から学校に入るとき

外から学校に入るとき「行き来」駆動抑制要因にかかわるセグメントから、①友人関係の悪化、②教室内の人的環境問題、③高圧的な指導、④引き継ぎ情報の不足、⑤学力不振、⑥発達障害、⑦発達上の特性、⑧知的障害という8つのコードが抽出された。①～②のコードは(1)「集団生活に馴染みにくい」とカテゴリー化され、③～⑤のコードは(2)「教員の指導が十分に行き届いていない」とカテゴリー化され、⑥～⑧のコードは(3)「障害等による発達上の特性がある」とカテゴリー化された。詳細は「表4」を参照されたい。以下ではカテゴリー別に述べる。

(1) 集団生活に馴染みにくい

「集団生活に馴染みにくい」というカテゴリーは、「友人関係の悪化」，「教室内の人的環境問題」という2つのコードで構成された。各コードでは次のような内容が語られた。「友人関係の悪化」では、友だちの陰口を言うなどの理由で友人関係が悪くなった、「教室内の人的環境問題」では、教室内で飛び交うの攻撃的な言葉が自分に向けられているような気がするということであった。

表4 外から学校に入るときの抑制要因

カテゴリー	コード	テキストの概要
集団生活に馴染みにくい	友人関係の悪化	友だち関係にひっかかりがあり納得できずに息苦しい
	友人関係の悪化	陰口を言うなどの理由で友人関係が悪くなった
	教室内の人的環境問題	教室内の攻撃的な言葉が自分に言われているような気がする
	教室内の人的環境問題	長髪が短髪になったのを友だちから揶揄された
教員の指導が十分に行き届いていない	高圧的な指導	常にかぶっていたフードをとるようにと強引に指導した
	高圧的な指導	夏休みの宿題未提出に対して厳しく叱責した
	引き継ぎ情報の不足	保育所や幼稚園に通っておらず就学の際に情報がなかった
	学力不振	学力不振である
障害等による発達上の特性がある	発達障害	発達障害の診断がありみんなと一緒にをすることが難しい
	発達障害	広汎性発達障害があり自然学校で友人関係のトラブルがあった
	発達上の特性	教室に入ろうと促すと痙攣を起すスイッチが入る
	発達上の特性	こだわりが強く、抑止されると切れるようなところがある
	発達上の特性	家庭訪問時に敬語で話をし、打ち解けているのか打ち解けていないのかわかりにくい
	発達上の特性	空気を読めないところがある
	知的障害	知的障害がある

### (2) 教員の指導が十分に行き届いていない

「教員の指導が十分に行き届いていない」というカテゴリーは、「高圧的な指導」、「引き継ぎ情報の不足」、「学力不振」という3つのコードで構成された。各コードでは次のような内容が語られた。「高圧的な指導」では、常にかぶっていたフードをとるようにと教員が強引に指導した、「引き継ぎ情報の不足」では、保育所や幼稚園に通っておらず就学の際に本人や家族に関する情報がほとんどなかった、「学力不振」では、学力不足で授業についていくのが難しいということであった。

### (3) 障害等による発達上の特性がある

「障害等による発達上の特性がある」というカテゴリーは、「発達障害」、「発達上の特性」、「知的障害」という3つのコードで構成された。各コードでは次のような内容が語られた。「発達障害」では、発達障害によってコミュニケーションをとるのが難しく、みんなと一緒にをすることが難しい、「発達上の特性」では、こだわりが強く、抑止されると切れるようなところがある、「知的障害」では、知的な発達が遅れているということであった。

以上から、「不登校」児童が家庭から外に出るときの「行き来」駆動抑制要因は、「家庭の養育環境が不十分である」、「家族と地域住民との関係が良好でない」、「学校に行かないことが家庭内の居心地の悪さにつながらない」という3つであり、外から学校に入るときの「行き来」駆動抑制要因は、「集団生活に馴染みにくい」、「教員の指導が十分に行き届いていない」、「障害等による発達上の特性がある」という3つであることが明らかになった。

#### 4. 考察

「不登校」児童が家庭から外に出るときの「行き来」駆動の抑制要因と外から学校に入るときの駆動抑制要因にはどのような意味があるのかを、子ども自らが属している集団の質に注目して検討する。集団の質に注目するのは、「行き来」が円滑にできる子どもであれば、家庭という集団と学級という集団のいずれにも抵抗なく属することができると考えられるからである。

##### 4.1 安心できる集団

家庭から外に出ることを抑制する要因として「家庭の養育環境が不十分である」こと、外から学校に入ることを抑制する要因として「教員の指導が十分に行き届いていない」ことが挙げられていた。衣食住のケアが適切になされないような不十分な養育環境であれば、その子どもにとって家庭は安心できる集団とはならない。また、教員から高圧的な態度で指導されるようなことがあれば、その子どもにとって学級は安心できる集団とはならない。したがって、これら2つの抑制要因は、子どもが家庭と学校間を行き来できるようになるには、子どもにとって、家庭や学級が安心できる集団となっている必要があるということの意味していると考えられる。

##### 4.2 開かれた集団

家庭から外に出ることを抑制する要因として「家族と地域住民との関係が良好でない」こと、外から学校に入ることを抑制する要因として「集団生活に馴染みにくい」ことが挙げられていた。地域住民と意思疎通が図られることなく、かれらから批判的な眼差しが向けられるような家族というのは、自分たちだけの世界を形成し、周りに対して閉鎖的な集団である。また、特定の子どもにとって馴染みにくい学級というのは、その子どもが学級の中で疎外されている状況を示唆しており、子どもにとって閉鎖的な集団である。したがって、これら2つの抑制要因は、子どもが家庭と学校間を行き来できるようになるには、子どもにとって、家庭や学級が開かれた集団となっている必要があるということの意味していると考えられる。

##### 4.3 インクルーシブな集団

家庭から外に出ることを抑制する要因として「学校に行かないことが家庭内の居心地の悪さにつな

がらない」こと、外から学校に入ることを抑制する要因として「障害等による発達上の特性がある」ことが挙げられていた。学校に行かないということで母子が結束しているような家庭というのは、排他的になることによって安定している集団である。また、発達上の特性がある子どもを受け入れにくい学級というのは、自分たちとは異なる子どもを排除するという点においてまとまっている集団である。したがって、これら2つの抑制要因は、子どもが家庭と学校間を行き来できるようになるには、子どもにとって、家庭や学級が排他性をとおして安定性が生じる集団ではなく、インクルーシブな集団となっている必要があるということを意味していると考えられる。

以上から、家庭から外に出るときと外から学校に入るときに生じる6つの駆動抑制要因は、子どもが家庭と学校間を行き来できるようになるには、子どもにとって、家庭や学級が、安心できる集団、開かれた集団、インクルーシブな集団となっている必要があるということを意味していると考えられる。

## 5. 結論

本研究の目的は、「不登校」児童の家庭と学校間における「行き来」駆動の抑制要因を、家庭から外に出るときと外から学校に入るときに注目して明らかにすることであった。X 県の公立小学校に勤務する7人の小学校教員に半構造化インタビューを実施し、入手した資料を分析した結果、「不登校」児童が家庭から外に出るとき「行き来」駆動抑制要因は、「家庭の養育環境が不十分である」、「家族と地域住民との関係が良好でない」、「学校に行かないことが家庭内の居心地の悪さにつながらない」という3つであり、外から学校に入るとき「行き来」駆動抑制要因は、「集団生活に馴染みにくい」、「教員の指導が十分に行き届いていない」、「障害等による発達上の特性がある」という3つであることが明らかになった。また、家庭から外に出るときと外から学校に入るときに生じる6つの駆動抑制要因は、子どもが家庭と学校間を行き来できるようになるには、子どもにとって、家庭や学級が、安心できる集団、開かれた集団、インクルーシブな集団となっている必要があるということを意味していると考察された。

ただ、上記のような集団を構築するには、さらに議論を深める必要があるであろう。少なくとも、安心できる集団と開かれた集団とインクルーシブな集団が、いかなる関係にあるのかという検討は必須であると思われる。具体的には、3つの集団を切り離してとらえるのか、ある集団が別の集団の前提になっているととらえるのか等について、個別の文脈をていねいに追いながら考えなければならない。

「1. 目的」で述べたように、家庭と学校間の「行き来」というのは、「家庭から外に出る」、「外から学校に入る」、「学校から外に出る」、「外から家庭に入る」という4つの行動によって構成されている。本研究では、これらのうちの「登校」にあたる、家庭から外に出るときと外から学校に入

るときの「行き来」駆動抑制要因が明らかになったが、促進要因については検討されていない。また「不登校」児童が学校から外に出るときと外から家庭に入るときの、「行き来」駆動抑制要因と「行き来」駆動促進要因についても検討されていない。今後の課題である。

※本研究は、「JSPS 科研費 JP16K04643」の助成を受けておこなったものあり、日本教育社会学会第 70 回大会（2018 年 9 月 4 日、於：佛教大学）の発表資料に加筆・修正を施したものである。

---

<sup>1</sup> 不登校の児童生徒数ではなく長期欠席者数を取りあげた理由は次のとおりである。「学校基本調査」（文部省）の「用語の解説」によると、不登校は「長期欠席者数」（前年度間に 30 日間以上欠席した者の数。欠席は連続である必要はない）の理由の 1 つであり、不登校児童生徒数は実態を反映したものとなっていないからである（保坂 2000）。

## 文献

- 1) 保坂 亨（2000）『学校を欠席する子どもたち 長期欠席・不登校から教育を考える』東京大学出版会。
- 2) 文部科学省（2017）『平成 28 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」』。
- 3) 笹倉千佳弘・井上寿美（2017）「小学校教員の認識からみた脱落型不登校児童の実態—登校阻害要因の観点から—」『就実教育実践研究』10, 15—22.
- 4) 笹倉千佳弘・井上寿美（2018）「学校と家庭間の『行き来』の観点からみた困難な家庭状況にある小学生の実態—学校・学級居場所化「きっかけ」把握のための研究方法を中心に—」『就実教育実践研究』11, 57—64.